
とある御坂と禁書目録

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある御坂と禁書目録

【NNコード】

N7889Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

もしもあの時上条ではなく御坂に出会っていたら…？ そんなもしどと禁ss。御坂が鉄橋での戦いの後出会ったのはシスター服の少女インデックス。彼女の生きる世界に足を踏み入れた御坂は。

。 こういう話なので多分かなり原作とは違うと思います。あ、キャラは原作の人がいっぱい出てきますが。妹達編もやるつもりです。御坂好きとインデックス好きにはぜひ読んで欲しいですね。原作での御坂とインデックスのスルーフuriに落胆している貴方！ちゃんと一人が活躍しますのでどうぞ一覧になつてください！（笑

序章 超電磁砲と行き倒れのシスター少女

七月一九日。

御坂美琴はいつもどおりあの男と鉄橋で戦った後、することもな
いので夜道をプラプラと歩いていた。

「あーつもう、今度あつたら絶対容赦しないんだからー。」

ビリ、と彼女は額から電気を出すと、彼女の近くを歩いていた少
年や少女が慌てて遠くへ避難した。

御坂美琴は学園都市の第3位の超能力者である。ついたあだ名は
“超電磁砲”^{レールガン}。だからこそ、負けるなんて屈辱は許せないのだ。
でもまあ、目標が出来るのはいいことよね、と言ひ聞かせていた
美琴は、はた、と足を止めた。
そして、そのまま硬直する。

田の前には、白いシスター少女が倒れていた。

「…何、これ」

美琴はボソリ、と呟いた。

そして、溜息をついてその場にしゃがみこみ、ぺちぺちと頭を叩
く。

「おーい生きてますかもしもーし」

何だこれ、と美琴は口の中でもういちど呟く。

美琴の良心はこまませつとけるかーーと美琴をせかしてこるが、
どうせで。

と、その少女はピク、と手を動かし、その瞬間

「お腹減った……！」

「はアー！？」

と、美琴に飛びかかった。「こあつーー！やこふるこよつーー！」
と美琴は動転しつつ電撃を出さなこよつに自制する。シスター少女
はお構いなしに叫ぶ。

「ご飯ご飯ご飯ー！」

「わ、分かつた、分かつたからーー！」

美琴は取り敢えずシスター少女を引き離し、もう一度、ため息。
シスター少女はこっちを見てつむりと涙田で訴えてくる
(外国人…?)

そこで美琴はこの少女が銀髪碧眼なのに気づいた。成程。中々可
愛い顔をしていた。

こまま放つて置いたら違つ意味で危険な気がした。

……金ならある。

「分かった。じゃあどこのかご飯食べに行きましょー！」

「ほんとーーありがとうなんだよーー！」

美琴が立ち上ると、シスター少女もぴょこん、と立ち上がった。
どうやらついてくる体力はあるらしく。

美琴は近くのジャンクフード屋に、足をいそいだ。

序章 超電磁砲と行き倒れのシスター少女（後書き）

感想や評価頂けたら嬉しいです！

第1章 1 インテックスと名乗る少女。

まず美琴が驚いたのは少女の食べっぷりだった。ひと皿ひと皿、確実に、しかもかなりのペースで消化されていく。皿を持ってくる店員も若干引いているらしく、皿をテーブルに置くとすぐに奥へ引っ込んでしまう。

「……一体どうしてそんなに入るのやう」

美琴がつぶやいている声が聞こえたのか、シスター少女はこつこつと可愛らしい笑みを浮かべて

「美味しいからだよ！」

と言つた。意味が分からない。

少女の食欲に触発されたのか、美琴も少し皿の料理をつまんだ。普通の冷凍食品の味だった。

数分で計48皿を食べ終えたシスター少女はにこにこと笑つてまづ、「ありがとう、美味しいかったんだよ！」と礼を言つた。

「自己紹介をしなくちゃね」彼女は唐突に言つた。「私の名前はね、インテックスって言うんだよ」

「……インテックス？」

美琴は聞き返した。変な名前だ。

日本語でいうなら『目次』か。

「見てのとおり教会の者なんだよ。あ、バチカンじゃなくてイギリス清教の方だけど」

「えと、ふうん……？」

よくわからないが美琴はとりあえず頷いておいた。

まあ、つまりはシスターなのだろう。その服装と同じく。

「ねえ、なんであんな所で倒れてたの？」

美琴は疑問に思っていたことを口にした。インデックスはああ、と笑つて

「追われてたの」

「……、」

美琴は黙つた。

追われていた？

この少女が？

「何？あんたの能力ってそんな、追われるほど貴重なものなわけ？」

だとしたらうなずける。大方、研究に嫌気がさして逃げ出したのかもしけないし。

が、インデックスは「うん、と首を横に振つて

「魔術師から」

「……まじゅ、つし……？」

知らない単語に美琴は眉をひそめた。

インデックスが嘘を言つているわけではなさそつだが、魔術師と

いつたらアレか、魔法をぱーっとつかうと美琴は頭の中で考えた。

「それって、魔術ってこと?」

「そうだよ。魔術。魔術を使うのがこっちの専門だからね」

「……そんなものが、実在するの?」

そんなことを語つ美琴にインデックスは笑つて

「あなたが知らなくていいことかも。あなたは凄く……この都市の住民、つて感じがするから」

お前には関係ない、と突き放されたのだ、と美琴はそう理解した。インデックスは口を布巾で拭いた。口元についていたソースが拭われる。

美琴は黙つてそれを見ていた。

「……おわれてるつて、何から?」

「んー、私も分からない。どこだらう。連中、いっぱい組織があるから」

「連中?」美琴は聞き返した。

「うん。魔術結社の者つてことは、確實だけど」

インデックスはさらりと。当然のように語つ。

美琴は何故だか 何故か、体中からにじみ出る汗によつて制服が微量に濡れていることにも気がつかず、

「魔術結社つて、何?」

「あなたは知りたがり屋さんのかな?だから、あんまり足を突つ込まない方がいいかもつて、私は思うんだよ」

「つまり、それほどのことにあんたは足を突っ込んでるつーことでしょう？」

美琴の鋭い指摘に、インテックスは黙つた。
そして、じくり、と頷いた。

「突っ込んでるから」^じと言つんだよ。オカルトは、^{あなた}科学たちとは違
うの。だから、知らないでいいかも」

ありがとね、とインテックスは笑つた。
お腹いつぱい^じ飯を食べさせてくれてありがと^う、と。

「ばいばい」

それだけ言つと、インテックスはすたすたと歩き去つてしまつた。
美琴は動けなかつた。

ビリ、と能力が漏れる。店員がビクツ^じとけりを見た。

「……なさけない」

インテックスは、あの変な少女は、居なくなつてしまつた。
そして多分、一度と会つことはないんだろうな、と美琴は思つた。

第1章 2 上条当麻の気遣い。

御坂美琴はベットの上で田を覚ました。

あれ、と思つて昨日の記憶を辿る。

そうだ

「歩く気力もなくなつたから、黒子に迎えにきてもうつたんだっけ

……」

その黒子は隣のベットにはいな。今日もまた仕事をしているのかもしねりない。

美琴はだるい体をお越して、パジャマから常盤台の制服に着替え

る。

「さて、出かけますか……」

当社比4倍位テンションの低い美琴は寮から出た。なんとなく、ふらふらと外に出る。

いつもよりも何故か周囲を気にしてしまつ。昨日の少女、インテ

ックスの姿を、探しているのだろうか。それとも、あの馬鹿を？

「……馬鹿馬鹿しいつたらありやしないわね

こんなことなら部屋で布団にくるまつて静かに寝ていればよかつたかも、と美琴は後悔した。でも、多分じつとしているのには耐えられなかつただろう。

魔術。

昨日知った”ソレ”の存在を、美琴は考えていた。
きっと、科学とは違う別の法則の話なのだろう。
そして、彼女はそれを使う連中に、追いかけ回されている、と。
さらに、それは知らなくていいほど、危険なものなのだと。

好奇心の強い美琴にとって、それは知りたいという欲求が強まるばかりの存在だった。もう、インデックスを探しているのが”魔術のことを教えてもらうため”なのか”彼女を助けたい”という理由なのか分からなくなつてくる。

7人しかいないレベル5だって、知らないことはあるのだから。
しかもそれが、中学生となれば。

「所詮、井の中の蛙つてことなのよね、レベル5私達は」

一方通行や垣根提督あたりが聞いたら激高しそうな台詞を美琴はボソ、と呟いた。

と。

「よつす、ビリビリ」

「あ……あんた」

見覚えのあるつんつん頭が声をかけてきた。

言つまでもない。上条当麻である。

当麻はいつもとは違う美琴の反応に首をかしげた。

「あれ？ 美琴さん、なんかちょっとテンション低いなー」「あー、うん。まあ、ね。憂さ晴らしに一発戦^ヤつとく？」

「全力で遠慮します」

そ、と美琴は簡素に言つた。

当麻は目を丸くしてなにやらふむふむと頷いた。

「ビリビリにもそんなテンションの時があるんだなー。上条さんは凄く勉強になりました」

「うひゃこわね……体中に電撃浴びせるわよ

「そんな言葉にすら覇気がない……これは振

ん？

ブチ。
美琴の血管が切れる音がした。

美琴が手を挙げると、当麻はおよ?という顔をした。

そして、美琴は大声で叫ぶと共に、雷撃を放つ。

「な、ん、で、あ、ん、た、は、テンションが高いんだ」「ホーッ！」

ハコベツ来ぢやつてまよよ美鶴かゑーつーへとやつぱり無傷の当

美琴はちょっと調子が戻ったのか、ふん、と鼻をならし

「可
以
用
？

「アーティスト」

「アラニヤー！」

さっきまで何も言わなかつたじやーん!とまたビリビリを幻想殺しで消す当麻。

しで消す当麻。

から今まで懶えきつていた周囲の田舎からへんはきて、何この夫婦漫才』という温かいものに変わった。全然嬉しくなかつた。

「はあ……あんたの株は今日大暴落よ」
「なんだよ折角元気づけようとしたのに」
「……え？ あれで？」

美琴は呆れたように半眼になつて当麻を見た。
当麻はそこで「今日予定ある？」と言ひ。
美琴は数秒考えていつた。

「……、ないわ」

「その間に何を考えていたのかはともかく。なら折角なら遊びに行
かね？ 折角夏休みなんだしさ」

「ほらへんでようやく美琴は本当に当麻が自分を元気づけようとして
していたことに気づいた。

そんなに自分の顔がいつもと違つたのか、と自分に呆れつつも頬
が緩む。ちょっと嬉しいかも。

「分かつたわ。じゃあ、行きましょう。ゲコ太祭りへ」
「なんだその祭り！？ ゼットー行きたくねーっ！」
「うるさいわね、今ゲコ太フェアやつてんのよー。ゴンベーイでー。」
「一人でいけそんぐらい！」

当麻は突つ込みつつも、美琴についてくる。
もう、インデックスや魔術のことは忘れよう。
そう思つて、美琴は今日を楽しむことにした。

そして、帰りのことだった。

それは、やはり運命と言うべきか、否か。

偶然と捉える人が多い中

美琴は、運命とそれを捉えた。

美琴は、魔術師に追われているインテックスを見た。

第1章 2 上条当麻の気遣い。（後書き）

うわあ……やっぱり起承転結くらいしか考えていないのですっから
かんの内容ですね。でも当麻を出したかった。それだけでした、実
は。あとインデックスと邂逅するための時間稼ぎ。

インデックスは刀を振り回す長身の女性と対峙していた。あれが魔術師なのだろうか、と美琴は怪訝に思う。インデックスが何事かを叫んだ。と 女性の姿が消えた。

「えつ……？」

その瞬間、インデックスの目の前に現れる。そして、その持つている大きな刀を降りおろそうとした。

インデックスが、殺されてしまう。

美琴は咄嗟に叫び、そしてインデックスの方へ駆け寄りながら雷撃を放つ。

「インデックス！」

バチャー！という派手な音がして刀女は瞬時に飛び退いた。美琴はインデックスと刀女の間に立ちふさがる。

「あ、あなた……」

「ちょっとあんた！こんな小さい子に何刀振り回してんのよー。」

インデックスの呴きを無視して美琴は怒声を放った。刀女は平然と答える。

「その子を捕まえようとしただけですが」

「捕まえ……ツー？」

美琴が息を呑む。こんな、こんな時代にそんなことを言つ輩がいるとは。

と、ちよこちよこ、とインテックスが美琴の服を引っ張った。そして、困惑と驚愕が入り交じつた不思議な表情で美琴に言つ。

「あ、あなたどうしてここにいるの？ 私なら大丈夫なんだよ！ だから逃げて…っ！」

美琴はカチン、と来た。

なら と敵が目の前にいるのを忘れて言い返す。

「なら、アンタはどうして刀女の攻撃を避けなかつたのよ」「そ、それは 最高防衛結界、”歩く協会” があるからなんだよ」「……歩く、教会？ 教会が歩くの？」

素で美琴は聞き返した。慌ててインテックスは説明する。

「そ、そつじやなくて 今は時間がないから詳しい説明ができないけど、この服自体が”どんな攻撃でも守れる”っていう機能を持つているの」

成程、と美琴は頷く前に「……無駄話はおわりましたか？」と刀女が声をかけてきた。

美琴は刀女を睨む。

「あら？ わざわざ待つてくれたの？」と嘲笑する。

「ええ、丸腰の相手に切りかかるほど私は外道ではないので」「……言つてくれるわね」

バチバチバチ、と美琴は額から雷撃を放つ。刀女はそれをよけた。
と 何故か美琴の体が切り裂かれた。

「ツー！」

美琴は息をのんだ。

ジワジワと血が滴り落ちる。後ろでインデックスが「だから逃げ
てつてばー！」と涙目で訴えてくる。

「あのね、インデックス。今私はあいつに喧嘩を売られた。だから
買う。アンタにはなんの関わりもない。つまりアンタはこの戦いに
口を出せないの」

「な…つ…？」

美琴の台詞にインデックスは動搖した。その隙に美琴はもう一度
雷撃を放つ。

しかしそれをまた避けられてしまつ いや。

「なるほどね、アンタは避けるしか出来ないってことか

「……何を言つているのです？」

「見たとこアンタの武器は刀。私の能力とは 相性が悪すぎる」

刀女はぐつと唇を一瞬だけ噛み しかしそれで?と笑う。

「当たらなければいいのです。そして、私にはそれが出来る

「あ…どうかしらね」

そして、美琴は空中に触れた。神崎の目が驚きで開かれる。
美琴が触つたのは空中ではない。空中に張り巡らされた ワイ

ヤーだ。

「な、なぜ見え…」

「私、電磁波で空間把握ができるのよね。だからアンタがワイヤーを張り巡らしたのも、手に取るように分かる」

「……あなたがこの学園都市第3位の超能力者、御坂美琴でしたか

……」

美琴はええともつとも言わず　ワイヤーに電撃を流した。

「ぐ、あああ…」

あまりの高圧電流に刀女はうめいた。そして、倒れる。インテックスが後ろで呟いた。「……すごい」

「じゃあ、今度は二つの時間よ、インテックスも」

「え！？私！？」

「当たり前。　その、魔術やら元氣にてと、インテックスが追わ

れている理由、吐いてもうから

第1章 3 神裂火織ＶＳ御坂美琴（後書き）

ずっとと思ってたんですけどやつぱり神裂と美琴の能力は相性悪いよな……ってことでスタイルの前にねーちゃんと。結構あつさり終わりますね、相性が相性なだけに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7889y/>

とある御坂と禁書目録

2011年11月26日16時48分発行